

令和4年度 調布市立多摩川小学校 学校評価報告書（校長 上杉 潤）

学校の教育目標				
◎思いやりのある子(徳) ○自分の考えをもつ子(知) ○体をきたえる子(体)				
目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像、教員像、児童・生徒像				
「令和の多摩川小学校」				
多摩川小学校の伝統と文化を尊重し、保護者・地域と一緒にして、未来を拓く力を育む学校				

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>						
	1 豊かな心(徳)	2 確かな学力(知)	3 健やかな体(体)			
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① 子どもを主体とした授業改善により、自己有用感を高めるための実践を行った。	A	① 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体を目指した授業改善を図った。	A	① 全校集会で運動する機会を増やし、体力の向上を図るために取組を行った。	B
	② 休み時間の決まりを代表委員会に提案したり、学校生活を見直す話し合いを(たまっ子会議)行ったりして、学校の約束を見直す一契機とした。	B	② 授業や校内研究を柱として、より効果的なタブレット端末の効果的活用について模索した。	B	② 体育授業の改善により、体力の向上と運動の日常化を目指した。	B
	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価
	① 児童アンケート「自分は人の役に立っていると思いますか」に対する肯定的評価は、71.7 ポイント。「お子様は、自己有用感をもっていますか」に対する保護者の肯定的評価は、75.3 ポイント。目標値には届かなかった。授業や異学年交流を中心として、子どもたちの自己有用感が高まる取組を工夫したい。	B	① 「授業で学んだことは分かりますか」の問い合わせに対して、93.8 ポイントの肯定的評価。保護者の評価も 87.2 ポイント。授業を通して、子どもたちは確かな学びが行えていると感じる。すべての児童に対して学びが保障できるようにするために、さらなる「個別最適な学び」の充実に取り組む。	A	① 運動する機会を計画的に増やすようにしたが、それが運動の日常化にそのままつながっていない。子どもたちのすすんで運動をしたかに対するアンケート結果は、肯定的評価が 76.8 ポイント。保護者の評価は、61.9 ポイント。これは、体力テストの結果にも現れている。本校の課題を分析し、解決するための方策を考え直し、実践していきたい。	B
	② 代表委員会や6年生を中心に、決まりの見直し等に取り組んだ。「学校の決まりや校庭遊びの決まりについて考えてみましたか」の問い合わせに対して 75.9 ポイントの肯定的評価であった。児童会活動や「たまっ子会議」の充実により、子どもたち一人一人が活躍できる場を充実させ、子どもたちの満足感や達成感を高めたい。	B	② タブレット端末の活用については、生活指導面の問題も並行して取り組んできた。活用については、93.9 ポイントの子どもたちの肯定的評価と、72.2 ポイントの保護者の肯定的評価を得た。今後、より効果的な活用について検討・実施する。	B	② 体育・保健体育の授業についても「個別際的な学び」と「協働的な学び」の一体化の視点を取り入れ、子どもたちの「学びに向かう力」の育成を通して、運動の日常化や体力の向上に努めたい。	B
	学校関係者	現状の課題把握とその対応について適切にできていると感じた。「思いやりのある子」を育てるための方向性が明確になっているので、その手立てを工夫することにより、学校の教育目標を達成させていただきたい。	児童の学力に対する取組は、できていると感じた。ただし、現状に甘んじることなく、学習に対しての苦手意識のある児童の対応について、さらなる対応を望む。学力数値の底上げをすべく対応を期待する。	放課後の遊び場など、地域で自由に遊べる場所が少なくなってきた。運動の日常化を考えた場合、学校生活においての「学びに向かう力」「運動に取り組もうとする力」を伸ばすための工夫が必要であると考える。		
学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>						
	4 特別支援教育の充実	5 保護者・地域との連携	6			
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価		
	① 一部の児童は、積極的に授業交流を図った。また、行事やその他の活動において、実態に即した交流活動を行った。	B	① 学校運営協議会の設立に向けて先進校の視察を行ったり、研修を積んだりしながら、来年度の取組について計画を立てた。	B		
	② 児童の情報共有は、計画的に行なった。支援が必要な児童についての対応は、組織的に行えるように継続して取り組む。	B	② 4年生は、多摩川を教材とした学習に取り組み、郷土愛を高める一契機となった。「たまっ子広場」では、全校児童で多摩川河川敷に行き、縦割り遊びを楽しんだ。	B		
	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価		
	① 交流は行なったが、それを子どもたちは「触れ合った」とは感じていなかった。行事や授業の触れ合いをこれからも継続しつつ、給食や休み時間など、日常的に「触れ合える」計画を進	B	① 学校評議委員会や学校関係者評価委員には、学校運営委員会設立について情報提供を行なった。委員には、学校の様子を覗いていただき、現状と課題を共有することができた。	B		

	4 特別支援教育の充実	5 保護者・地域との連携	6		
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	
	① 一部の児童は、積極的に授業交流を図った。また、行事やその他の活動において、実態に即した交流活動を行った。	B	① 学校運営協議会の設立に向けて先進校の視察を行ったり、研修を積んだりしながら、来年度の取組について計画を立てた。	B	
	② 児童の情報共有は、計画的に行なった。支援が必要な児童についての対応は、組織的に行えるように継続して取り組む。	B	② 4年生は、多摩川を教材とした学習に取り組み、郷土愛を高める一契機となった。「たまっ子広場」では、全校児童で多摩川河川敷に行き、縦割り遊びを楽しんだ。	B	
	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	
	① 交流は行なったが、それを子どもたちは「触れ合った」とは感じていなかった。行事や授業の触れ合いをこれからも継続しつつ、給食や休み時間など、日常的に「触れ合える」計画を進	B	① 学校評議委員会や学校関係者評価委員には、学校運営委員会設立について情報提供を行なった。委員には、学校の様子を覗いていただき、現状と課題を共有することができた。	B	

	めたい。子どもたちの「触れ合い」に対する肯定的評価は、50.9 ポイントであった。				
	② 「困った時に学校はみんなのサポートができましたか」の問い合わせに対し、子どもたちの肯定的評価は81.9 ポイント。保護者は、80.0 ポイント。課題の一つは、肯定的評価ではなかったポイントである。一人一人を大切にする教育の実現に向けて、校内体制の再構築と取組についての見直しを行う。	B	② 多摩川を地域の教材として活用できているかという問い合わせに対して、子どもたちは、85.1 ポイント、保護者は 70.2 ポイントの肯定的評価であった。学年によって河川敷を活用した学習や取組を行なったが、地域を愛する心を育むために、多摩川を教材として効果的に活用できるよう工夫する。	B	
学校運営会議 議長	多摩川小学校は、通常級と特別支援学級がある。この特性を最大限生かし、児童がお互いを思いやる気持ちや全ての友達を認め合う心を育ててほしい。		学習や教育活動を通して、多摩川を深く知り、多摩川で安全に過ごしたり地域を愛したりする気持ちを育んでほしい。		

人材育成・組織運営

自己評	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主幹教諭を中心に、打ち合わせ後の計画的なOJTを行うことで、教職員の見識が高まった。 ○ 1年を振り返りながら教職員が主体的に職務に取り組むことができるよう校務分掌組織の見直しを行い、教職員一人一人の自己有用感が高まるような教育活動を展開する。
学校関係者	<p>すべての教職員が自己有用感を高められるように、組織の役割を明確にし、そのポジションで自覚を促し、責任を全うできるような組織構成を望む。そのためには、教職員に学校経営方針に則った適切な権限を与え、分掌ごとに主体的な活動を保証することも効果的であると考える。</p> <p>学校状況を的確に把握し、教員の授業力、生活指導力を高めるための研修は、今後も続けるべきである。</p>

中期的な経営目標の達成状況

学校目標の重点目標を達成するための視点を明確にする運営に取り組んできた。結果として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な取組の視点をもった授業改善を行ったり、児童の「主体性」と「自己有用感」を高めるための教育活動の実践を行ったりすることができたと考える。さらに、実践を積むことで学校目標の具現化が図れると考えている。

次年度の重点課題

- 校内研究を柱とした「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体に向けた授業改善
- 体力の向上を図るための体育授業の改善と運動の日常化への取組
- 不登校児童への支援と体制の整備
- 子どもを主語にした教育活動の実践
- いじめの未然防止と迅速な対応
- 学校運営協議会設立に向けた準備